「愛によって働く信仰」（第一）
ガラテヤ５：６

August.28.2022

ガラテヤ５：６　キリスト・イエスにあって大事なのは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。

今日のメッセージは、シンプルです。今日の聖書箇所から付けた説教題が、「愛によって働く信仰」となっていますが、この節の強調点も、愛によって働く信仰ですし、「愛によって働く信仰」が、キリスト・イエスにあって大事と、聖書も言っています。

けれどもわかるようでわからないところは、信仰が大事であればわかりやすいですし、愛が大事でもわかりやすいのですが、わかりにくいのは、愛によって働く信仰だけ、という点です。

愛によって働く信仰、みなさんはどうでしょうか。愛も、信仰も、聖書で多く記されていることばですが、その２つがくっつくと愛によって働く信仰となると、わかるようでわからない、そういう印象を持ちました。

そこで、愛によって働く信仰とは、どういう信仰なのか、共に考えてみましょう。このガラテヤ人への手紙を書いたのはパウロと言われていますが、そのパウロさんが、愛について書きしたためているのが、コリント人への手紙第一の 13 章です。

第１コリント１３章４～７節
4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。
5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、
6 不正を喜ばずに、真理を喜びます。
7 すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。

この愛の性質を参考に、この愛のご性質によって働く信仰と考えると、愛によって働く信仰が、一気に具体的になります。

つまり、愛は寛容であり、ですから寛容な信仰、愛は親切ですから、親切な信仰、また人をねたみませんですから、ねたまない信仰、愛は自慢せず、ですから自慢しない信仰、高慢になりません、ですから高慢にならない信仰、礼儀に反することをせず、ですから礼儀に反しない信仰、自分の利益を求めず、ですから自分の利益を求めない信仰、苛立たず、ですから苛立たない信仰、人がした悪を思わず、

ですから人がした悪を思わない信仰、不正を喜ばず、ですから不正を喜ばない信仰、真理を喜びます、ですから真理を喜ぶ信仰、すべてを耐え、ですからすべてを耐える信仰、すべてを信じ、ですからすべてを信じる信仰、すべてを望み、ですからすべてを望む信仰、すべてを忍ぶ、ですからすべてを忍ぶ信仰となります。

これが愛によって働く信仰だと言われると、自分の信仰は、まだまだだと思わされます。けれども心配する必要はありません。一人がすべての愛によって働く信仰を持ち合わせなくてもいいんです。

教会に集うある人が寛容な信仰をもち、また別の方が、親切な信仰を持つといった具合に、ひとりが一つ、二つと愛によって働く信仰を持って集められている、それが教会です。

そのようにこの箇所が、読める時、愛によって働く信仰だけが大事、という意味が見えてきます。私たちは、教会全体で愛によって働く信仰を実践しているのです。私の存在も、あなたの存在も、まさに愛によって働く信仰の一つとしてなくてはならない存在なのです。

ですから教会に集う一人ひとりは、同じイエスさまを信じていても、その信仰の傾向に違いがあるのです。まさにその点においても、ひとりひとりが愛によって働く信仰の寛容な信仰が必要になり、すべてを耐える信仰、すべてを忍ぶ信仰が必要なのです。

６８年間、この地で宣教を続けて来た土浦めぐみ教会が、これからも、愛によって働く信仰を大事に、一人ひとりがその愛を携え、お互いの違いを受けとめ合い、支え合い、助け合い、これからもキリストのからだなる教会として、豊かな実が結ばれていくようにお祈りしています。

ヨハネの手紙第一　４章１２節
いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

祈ります。

「私の全部を背負われる神様」（第二）
イザヤ　４６：３－４

August.28.2022

イザヤ書４６章３～４節
3 ヤコブの家よ、わたしに聞け。イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。
4 あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。

この聖書箇所から生まれたと思われる有名な詩は、マーガレット・Ｆ・パワーズさんの「あしあと」という詩です。

「あしあと」　マーガレット・Ｆ・パワーズ
ある夜、私は夢を見た。私は、主と共に、なぎさを歩いていた。
暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。どの光景にも、砂の上にふたりの足跡が残されていた。一つは私の足跡、もう一つは主の足跡であった。

これまでの人生の最後の光景が映し出された時、私は、砂の上の足跡に目を留めた。
そこには一つの足跡しかなかった。私の人生で一番辛く、悲しい時だった。
このことがいつも私の心を乱していたので、私はその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。私があなたに従うと決心した時、あなたは、すべての道において、私と共に歩み、私と語り合ってくださると約束されました。それなのに、私の人生の一番辛い時、ひとりの足跡しかなかったのです。一番あなたを必要とした時に、あなたが、なぜ、私を捨てられたのか、私にはわかりません。」

主は、ささやかれた。「私の大切な子よ。私は、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。足跡が一つだった時、私はあなたを背負って歩いていた。」

そして、その「あしあと」から生まれた有名な賛美は、「Footprints」。
「Footprints」は、賛美しませんが、この「あしあと」や、「Footprints」を賛美しながら思わされることは、聖書が語る救いの広がりです。

私たちの罪を赦すだけの「救い」ではなく、私たちの全部を背負って救い出してくださる神さまを私たちの内に描かせてくれます。

聖書が語る「救い」を、教会は伝統的に、イエスさまの十字架を通して語ってきました。私の罪のため、あなたの罪のためにイエスさまは十字架に磔にされ、苦しまれ、命まで与え尽くされたゆえに、私たちは決して罰せられないと語ります。この説明の中心は、罪に対する神さまからの審き、または神さまからの罰、そこからの救いです。

しかし、聖書が語る救いは、罪からの救い、審き、罰からの救いだけではありません。私たちを「あらゆる出来事」「あらゆる状況」「すべての弱さ」「すべてのつまずき」から助け出してくださる救いです。私の全部を背負い、救い出してくださる救い。

みなさんは、この作品をご存知でしょうか。そしてその作者をご存知でしょうか。ミケランジェロです。では、これがどこにあるかもご存知でしょうか。ローマのバチカンのサンピエトロ大聖堂です。

これは、イエスさまの母マリヤが、十字架で亡くなったイエスさまの亡骸を抱えるピエタと呼ばれる作品です。ミケランジェロ２４歳の時の作品です。

この部分を拡大すると・・・
これです。イエスさまの手の拡大写真ですが・・・すごくリアルですよね。
私は、この作品に魅せられ、ピエタの写真集を購入したのですが、そこからの一枚です。これが２４才のミケランジェロの作品です。彼のすごさを感じます。そしてもう一つのミケランジェロの作品を見てもらいましょう。

これもミケランジェロのロンダニーニのピエタと呼ばれる作品です。これは、ミケランジェロが８９歳で亡くなる直前までノミを入れていた作品です。手前の足が見える人物がイエスさまで、後ろにいるのがマリヤです。

どうでしょうか。２４歳の時のピエタと８９歳の時のピエタを見ながら、何を感じますか。ある先輩の先生が、私に教えてくれました。マリヤの姿こそ、ミケランジェロ本人なんだよ、と。

若きミケランジェロは、イエスさまの亡骸をしっかりと受け止めています。私が、あなたの死を受け止め、あなたの死が無駄にならないように、しっかりやりますよ！という力強さを感じられるほど、母マリヤは、顔はまだ若い女性の顔ですが、イエスさまを抱えている足は、大きく堂々としているように見えます。しかし晩年のピエタは、全く構図が変わっています。いや、若き日のピエタと逆転しています。亡骸のイエスさまが、母マリアをおんぶしている感じです。実際にはありえない亡くなったイエスさまが、母マリヤを背負っている姿。しかしそこにミケランジェロの告白、証しが込められているのです。

この変化に見られるミケランジェロの告白、証しとは、自分は若い時、イエスさまのために何でもしますと思い歩んだが、何もできなかった。

何もできなかっただけでなく、イエスさまを痛めつけ、傷つけ、悲しませることばかりだった。しかし、イエスさまを、どんなに痛めつけても、何度傷つけても、繰り返し悲しませても、そのイエスさまが、私を背負い、私を救い出してくださる。

これ以外に自分の救いはありえないという告白、証し。これが、８９歳になったミケランジェロの信仰であり、これが旧約聖書の時代から神さまが示してこられた救いです。

どんな罪があっても、どんな思い出したくない過去があっても、昔に遡ってやり直したい人生であっても、神さまは、イエスさまは、あなたの全てを背負い、救い出してくださるのです。

歴史に残る素晴らしい作品を数多く残したミケランジェロでさえ、最後に行き着いた救いの理解は、イエスさまに背負って救い出してもらう以外に救いはない、というものでした。

否、イエスさまに背負って救い出してもらえる道が約束されているからこそ、ミケランジェロは、完成できないことが分かっていても、中途半端に終わることが見えていても、石にノミを入れ続けられたのでしょう。

私たちも、私の全部を背負って、救い出してくださる神さまを受け入れる時、例え中途半端なことしかできなくても、また失敗に終わるようなことになっても、イエスさまが背負って救い出してくださるからこそ、死ぬ間際まで石にノミを入れ続けたミケランジェロのように、私たちも、最後の最後まで、自分らしく、自分にできる精一杯のことをし続けながら、生きることができるのです。

神さまは、あなたの全部を背負って、救い出してくださるお方です。胎内にいる時から、産まれる前から、そして年を取っても、白髪になっても、私の全部を背負って救い出してくださるお方です。ここに私たちの「希望」があります。この神さまを信じて歩んでいきましょう。

祈ります。

「ここに座って、ここにいて」（第三）
マルコ　１４：３２－３４

August.28.2022

マルコ１４章３２～３４節
32 さて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」
33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、
34 彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」

今日は、第一礼拝では「愛によって働く信仰」という題で説教させていただき、第二礼拝では、「私の全部を背負われる神さま」という題で説教をしました。

そして第三礼拝では、この箇所から「互いに愛し合うこと」の具体的な行動について、取り上げたいと思っています。

けれども、このゲツセマネの祈りの個所から、十字架刑を前にしてもだえ苦しむ場面から、互いに愛し合うメッセージが見えてくるのでしょうか。

そこで注目したい言葉が、説教題になっている言葉です。「ここに座って」（３２節）「ここにいて」（３４節）です。

イエスさまが、十字架を前に、「深く悩み、もだえ始め」られた時、イエスさまは、お弟子さんたちに、何を求めていたでしょうか？

それが、この２つの「ことば」に現れています。「ここに座って」「ここにいて」です。

この２つのことば、「ここに座って」「ここにいて」には、どんなイエスさまの思いが込められているのでしょうか。

それは言うまでもなく、「一緒にいてほしい」という気持ちです。十字架刑を前にして、また死によってもたらされる別れを前にして、イエスさまは、素直にお弟子さんたちに「ここに座って・・・」「ここにいて・・・」、「一緒にいて・・・」と願っておられる。

しかし、それは、これまでイエスさまご自身が、お弟子さんたちに示してきた行動だった。イエスさまは、お弟子さんたちのそばに座り、お弟子さんたちのそばに居続けた。

マルコ４章３５節以降で、お弟子さんたちの舟が突風に合い、舟が水でいっぱいになる中、イエスさまは、お弟子さんたちのところで居眠りしつつ、お弟子さんたちそばにいました。

さらにマルコの福音書６章４５節以降で、お弟子さんたちだけが乗っている舟が、向かい風に遭い、漕ぎあぐねている時、イエスさまは、お弟子さんたちの舟に行かれ、お弟子さんたちのそばにいました。

イエスさまがお弟子さんたちに示された愛、実践された愛、それは、べったりの愛ではないけれどもここに座って、ここにいて、という「そばにいる愛」。

イエスさまは、これまでのご自身の姿を思い出させるように、ゲツセマネの場面でお弟子さんたちに、「ここに座って」「ここにいて」と求められたのでしょう。

私たちの互いに愛し合う愛は、どうでしょうか。「ここに座って」「ここにいて」という姿勢が見られるでしょうか。イエスさまが実践され、私たちにも求められていることは、決して難しいものではありません。

「わたしが祈る間、ここに座っていなさい」「ここにいて、目を覚ましていなさい」です。イエスさまは、具体的なサポートをされるお方でしたが、しかし、その土台、その基本は、「一緒にいる」という姿勢でした。

神さまは、約３０年前、私をこの男性と出会わせてくださいました。五郎さんが初めて礼拝堂に入って来られた時、「ここに来て、ここに座って」と言われた証し。どんな方が礼拝にいらしてくださっても「ここに座って」「ここにいて」と声をかける人たちで満ちている教会、寂しくされている方のところに出て行き、「ここに座って、ここにいていい？」と声をかけるクリスチャンを送り出す教会

このような教会として、またこのような教会に連なるクリスチャンとして、愛を実践し、「ここに座って」「ここにいて」と声を掛け合い、今週も歩ませていただきましょう。

祈ります。